連合国軍捕虜問題：真実な和解のための一側面
―『戦争トラウマ記憶のオーラルヒストリー：第二次大戦連合軍捕虜とその家族』著作紹介―

Aspects of Genuine Reconciliation of the POW issue
―An introduction to a book on the trauma of POWs and their families―

中　尾　知　代
NAKAO, Tomoyo

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第55号　2023年３月　抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.55 2023

連合国軍捕虜問題：真実な和解のための一側面『戦争トラウマ記憶のオーラルヒストリー：第二次大戦連合軍捕虜とその家族』著作紹介

中　尾　知　代

The Aspects of Genuine Reconciliation: an introduction to a book on POW Trauma : The Oral History of War Trauma : WWII exPOWs and their families

はじめに
1. 著者紹介（Author）
2. 著作の内容（Book Summary）
3. 目次（Index）
4. 上野千鶴子と斉藤環の書評（Book Review by Chizuko Ueno and Tamaki Saito）
5. 著書の正誤表

はじめに

和解についての一側面として、捕虜の受けたトラウマと、家族につながるトラウマは欠かせない問題である。そのトラウマの外部の責任主体を明確にし、トラウマから自由にならなくては、元捕虜やその影響を受けた家族、民間人抑留者の問題は解決できないからだ。本稿では、長期間、元捕虜や民間人抑留者の体験をオーラルヒストリーを中心に調査してきた結果をまとめた、中尾知代著『戦争トラウマ記憶のオーラルヒストリー　第二次大戦連合軍元捕虜とその家族』（2022年7月30日出版、日本評論社）を紹介し、相互理解に基づいた真の和解を探る一助とする。これまでの調査をまとめた拙著を日英両方の文章とで紹介し、上野千鶴子氏と斉藤環氏の書評を紹介したい。加えて、正誤表も記す。インターネットのキンドル版も出ているので、ネット上に正誤表がある方がベターであると考える。

1. 著者紹介

中尾 知代（ナカオ トモヨ）

1960年生まれ。奈良女子大学英文科から英国ウォリック大学史学科に留学後、東京大学修士課程修了。岡山大学教養部に奉職し、文学部に移籍後、ブリティッシュカウンセル奨学生としてエセック

岡山大学大学院社会文化科学研究科行動科学学科目准教授。

ス大学博士課程に留学。外務省専門調査員を勤める。岡山大学に勤務しつつ研究を続け、2016年にPh.D.取得。JOHA（日本オーラル・ヒストリー学会）の設立人・理事・研究活動委員長、国際オーラルヒストリー学会アジア評議員を歴任。2006年オックスフォード大学フェロー。2015年度 フルブライト・リサーチ・フェローとしてコーネル大学を拠点に、捕虜・抑留者研究を行う。日本トラウマティック・ストレス学会会員。
主著に『日本人はなぜ謝りつづけるのか』（NHK出版、2008）、共著に『歴史の壁を超えて―和解と共生の平和学』（法律文化社、2004）、『レジリアンス・文化・創造』（金原出版、2012）などがある。専門社会調査士。

The Author
Tomoyo Nakao（author）
Associate Professor, Department of Behavioral Science, Graduate School of Social and Cultural Sciences, Okayama University.
Born 1960. After studying in the Department of English Literature at Nara Women's University and in the Department of History at Warwick University in the United Kingdom, she completed her master's degree at the University of Tokyo. She worked at the College of Liberal Arts, Okayama University, transferred to the Faculty of Letters, and then studied at the University of Essex as a British Counsel Scholar. Served as an expert investigator for the Ministry of Foreign Affairs. She continued her research while working at Okayama University and obtained her Ph.D. in 2016. She served as the founder, director, and chair of the Research Activities Committee of the Japanese Oral History Association（JOHA）, and as a member of the Asia Council of the International Oral History Association. She won the position of Fellow of Oxford University in 2006 and a Fulbright Research Fellow in 2015, conducting research at Cornell University on prisoners and detainees issue. She is a member of the Traumatic Stress Society of Japan.
She is the author of several major books, including *Why the Japanese Keep Apologizing*（NHK Publishing, 2008）and co-authored *Beyond the Barriers of History: A Study of Peace in Reconciliation and Symbiosis*（Horitsu Bunkasha, 2004）and *Resilience, Culture and Creation*（Kanehara Publishing Co., Ltd., 2012）.
She is a Professional Social Researcher

2. 著作の内容

本書は、トラウマとPTSD（Post Traumatic Stress Disorder :心的外傷後ストレス障害）に基づ

いた、元連合軍捕虜・民間人抑留者及びその家族のオーラルヒストリー調査の記録である。1994年に英国で捕虜問題に直面した著者は、1995年の戦後50周年の英国でのVJデイ[1]の祝祭 を契機にオーラルヒストリーの方法を学び、関係者にインタビューを始めた。このような背景のもと本書は、「捕虜問題」「民間人抑留者問題」の概要と英米蘭の捕虜の諸組織を説明し、1998年当時の天皇夫妻の訪英、続く2000年の訪蘭時の抗日デモの様子をフィールドワークに基づいて記述する。その中には、日本で報道されなかった悲痛な声も残されている。

捕虜と家族の体験記録を扱う前半では、元捕虜や元抑留者たちの苦難や怒り、日本に対する憎悪や嘆きが描かれる。「収容所の両側のドアから入ってきた監視兵たちにお辞儀をすると片方に尻を向けたと殴られる」というようないじめや、地獄船と言われた「りすぼん丸」のサバイバーの慨嘆など、実例も多岐にわたる。彼らの陰になりやすい妻たちの体験も本書は見過ごさない。夫の悪夢に悩み、DV・不妊を経験したり離婚に至る者もいる。デモで日の丸を焼いたカプラン氏[2]の妻が、夫の死後に語った自身の生きざまは痛ましい。本書はまた捕虜の受けたトラウマが子供に継承される様も詳述する。食事を全部摂れないとひどくぶたれるなど、娘たちは元捕虜の後遺症に苦労するが、娘たちの多くは、父を見捨てず記念館・記念碑の設立・経験談の本を編む事などで解決を試みる。父が厳しく対応した息子たちの反応もいくつか挙がっている。さらに、本書はトラウマの診断基準の＜DSM―5＞（精神疾患の診断･統計マニュアル）と、元捕虜や家族の経験やフラッシュバック・無感動・怒りやすさなどの症状を照合し、PTSD判定の可否を実証する。

なお、元捕虜らの記憶や語りに誇張や記憶違いはないかといった疑問には、「トラウマ記憶の信ぴょう性」の章で詳しく応答している。また、「トラウマ記憶を語るという事・聴くという事」の章は、＜被害者＞である語り手と、＜加害者側＞である聴き手（著者）の関係性が語りにどう影響するかを分析し、元捕虜らが＜元敵側＞に語り伝え、辛い記憶を預けることによって、癒されていくプロセスを整理する。著者や日本人との接触により、非人間的・残酷だという日本人イメージが変化する様子も描く。全体を通して、元捕虜・元抑留者や家族たちのトラウマの解消へ向けて、再発防止・謝罪・償いの必要性について考察し、トラウマ被害者と加害者間の相互理解に基づいた真の和解の可能性を希求する。本書は捕虜問題・抑留者問題の奥深さを伝える一冊であり、元日本兵のトラウマやその家族への影響についても参考にもなるはずだ。

注：[1] VJディ祝祭：連合国では、８月15日が「対日戦勝記念日、VJディ」と呼ばれている。Victory over Japan Day（対日戦勝記念日）。1995年の50周年には数日にわたる祝祭がもたれた。

[2] デモで日の丸を焼いたカプラン氏：1998年の天皇皇后訪英の際のできごと。カプラン氏は泰緬鉄道に送られたリトアニア系・ユダヤ系スコットランド人。のちに恵子・ホームズ氏主催の旅で訪日。泰緬鉄道の憲兵隊で通訳を務めた永瀬隆氏とも会い、親日的になり、しばしば和解のシンボルとして新聞や書籍に登場する。しかし日本政府が元捕虜らに謝罪・補償をするべきだという主張は訪日後も全く変わらなかった。

（POW研究会　ニュースレター29号から許可を受けて転載）

Oral History of War Trauma Memories: WWII Allied Prisoners and Their Families

By Tomoyo Nakao, Nihon Hyoronsha July 20, 2022

3,740 yen（tax included）　Kindle edition: 3,553 yen

：：：

father's issues but instead confront and recover their trauma through editing memorials and books about their experience and assisting in establishing war memorials or museums. This book also deals with some reactions from the sons of ex-POWs and the harsh treatment they experienced from their fathers.

Furthermore, the book looks at the diagnostic criteria of trauma via the DSM-5（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders）and compares it with the experiences of the ex-POWs and their family members and their resulting symptoms such as flashbacks, apathy, and irritability, to demonstrate the feasibility of evaluating their experience in the context of PTSD theory.

Questions such as whether the memories and narratives of the ex-captives were exaggerated or misremembered are answered in detail in the section: "The Authenticity（Credibility）of Traumatic Memories". In addition, the chapter "Talking and Listening to Traumatic Memories" analyzes how the relationship between the narrator（the victim）and the listener（the author, racially and nationally a member of the perpetrator's side）effects the narrative and the catharsis in ex-captives telling stories to the ex-enemy's side and depositing their painful memories. The book also recounts how the narrator's image of the Japanese as an inhuman and cruel race, an image understandably born out of their specific experience, changes due to contact with the author and contemporary Japanese. Throughout, the book considers the ideas of and the need for prevention of recurrence, for apology and atonement, hope in the possibility of genuine reconciliation based on mutual understanding between the sides representing the trauma victims and perpetrators, and the role that such a reconciliation plays toward the resolution of trauma among individual ex-POWs, ex-detainees and their families. This book aims to convey the depth of the POW and detainee issues whilst also serving as a comparative reference for the trauma of ex-Japanese soldiers and their traumas' impact on their families.

（Reprinted from the Newsletter 29, translated with the permission of POW Research Network Japan）

---

[i] VJ DAY celebrations: August 15th is known by the Allies as "VJ DAY"（Victory over Japan）, and still commemorated. The 50th anniversary of VJ day in 1995 was marked by several days

of festivities.

[ii] Mr. Caplan burned the Japanese flag at a demonstration during the Emperor and Empress's visit to Britain in 1998. Mr. Caplan is a Scotsman of Lithuanian Jewish heritage who was sent to the Thai-Burma Railway. He later visited Japan on a trip hosted by Mrs. Keiko Holmes O.B.E.. He also became acquainted with Takashi Nagase, an interpreter in the military police who was stationed on the Thai-Burma Railway. Despite his experiences, Mr. Caplan became pro-Japanese, often appearing in newspapers and books as a symbol of reconciliation, but nonetheless his vocal insistence on an apology and reparations from the Japanese for the ex POWs remained steadfast even after his visit to Japan.

3. 目次

第一章　元捕虜・民間人抑留者問題とは何か

連合軍元捕虜・民間人抑留者とは

ゴボウと木の根

精神的後遺症

英国の戦後の捕虜団体

捕虜たちの抗日運動――日本を訴える裁判

英国の元民間人抑留者

日本に対する英国の怒り――日英の意識のずれ

残酷な日本人

VJデイの祭典――一九九五年の狂騒曲

旧オランダ領東インドの元民間人抑留者

EKNJとJES――オランダの元民間人抑留者と元捕虜の団体

二〇〇〇年の天皇皇后オランダ訪問とデモ

献花をめぐるオランダと日本の意識のずれ

泣き崩れた女性

もう一つのデモ

アメリカの捕虜・抑留者問題

日本に対する裁判と謝罪・補償

ホロコーストと連合軍捕虜虐待の重なり

原爆が捕虜と民間人を救ったという観点について――捕虜抹殺命令

アメリカ人の元民間人抑留者

第二章　元捕虜たち・男たちの経験
東京の収容所に囚われたデイヴィッド・ウィルソン
日本人男性の「殴る文化」？
矛盾した日本人？
「地獄船」りすぼん丸に乗った捕虜フランク・ベネット
今も残る痛み
金瓜石収容所の捕虜たち
日の丸を焼いたジャック・カプラン
元民間人抑留者たちの声
オランダの民間人抑留者――「豚籠事件」
二次的被害者――収容所を解放したビルマ戦退役軍人の例

第三章　元捕虜の妻たち
妻・未亡人の苦しみ
悪夢・フラストレーションの共有
離　婚
暴力の連鎖
性と男性の不妊
病気の看護
共有できない経験
夫側の気持ち
共有するための努力
ジャック・カプランの妻クローディア、語る
スコティッシュ・ウィドウ
空色の目のチア・リーダー、アイリス・ティザリントン
女たちの語り方
妻たちの敵意
妻の語りが崩す「国民の神話」「男性／夫の神話」

第四章　〈父の娘〉の戦争
父の娘
モニュメントを作る娘たち

元捕虜に付き添う娘
父のトラウマを内面化する娘たち
赦すが、忘れない
消えた娘たち
リンダ・ローマクスの例のフロイト的解釈
本を紡ぐ娘
感情と痛みの共有
父を理解したい娘たち――距離を埋めるために
吸収される娘の生
怒りを受け継ぎ、問い続ける娘たち
会議・展示館・伝記――記憶の継承を行う娘たち
息子の立場――捕虜の娘と息子の対比
ミッシング・ピース

第五章　トラウマ記憶の諸相
トラウマ記憶とは
捕虜たちのトラウマ記憶
政府から出された「捕虜経験を語るな」という命令
複雑性PTSD
NICEについて――DSMを捕虜のトラウマ判断に用いるわけ
DSM-5と捕虜・民間人抑留者経験
記念日をトリガーとするトラウマ
「日本」を回避すること
日本製品への嫌悪、日本からの「遁走」
自己否定につながるトラウマ
怒りの暴発
狭い空間に閉じ込められた男性集団の人間嫌い
有罪意識・恥
DSM-5のD基準とICD-11の複雑性PTSD
サバイバーズ・ギルト（生き残りの罪責観）と信仰
トラウマの再体験――悪夢による想起
夢により再起・想起され続ける「体験」の記憶
悪夢から覚める経験

トラウマ解消のための日本政府告訴
末期の悪夢が再起させる「経験」
フラッシュバックと想起
対象の混同・憎悪観の転移
女性・家族に移譲されるストレス
元捕虜対日本の関係と、児童虐待における親子関係の類似性
元捕虜と和解・癒し
PTSDと「賠償神経症」――元捕虜が訴える理由

第六章　元捕虜たちの語りと記憶の信ぴょう性
トラウマ記憶の精度
トラウマ記憶のジェニュイン性（genuineness）――誇張や虚偽について、英国の場合
捕虜と「いじめ」
「告白」の文化圏と、語りの真実性、ジェニュインであることの大切さ
なぜ今になって語るのか――戦争経験高齢者の記憶の信ぴょう性
継承への願い、懺悔・悔悟の思い、疑問・誤解を避けたいために真実を語る傾向
記憶の選択性と抑圧された記憶の記録部位
記憶違いとその意味合いについて
「記憶違い」の可能性をもつ記憶の検証
悪夢の記憶――赤子殺し
伝聞記憶が広まる理由
「記憶違い」を辿って事実確認に利用できる場合
タマキ――三つの「証言」の中の監視兵
語り手の年齢差・視野
記憶を組みあわせること

第七章　トラウマ記憶を語るということ・聴くということ
戦争とジェンダー・エスニシティ――語り手と聴き手のラポール形成
元捕虜との関係
女性民間人抑留者との関係――ジェンダーとポストコロニアリズム
「慰安婦」女性との関係性
オーラルヒストリーでトラウマ記憶を聴く場合の立場の置換
元捕虜の語りの特徴

出身地域の差――気質、体質、連合国の間の文化差異、被植民地化の体験
語りにおけるユーモア
トラウマ記憶を語る・辿ることの意味
語りと癒し
癒し・セラピーとの共通性
セラピーによる記憶変化と戦争責任――セラピーの可否
「謝罪」「賠償」のセラピー的意義について――日本不信を癒すために
戦争のオーラルヒストリーにおける共感疲労と代理受傷――聴き手の受けるトラウマ
代理受傷
聴き手の受傷――罪悪感とモラル・インジャリー
家庭に持ち込まれるストレス連鎖
オーラルヒストリー調査に伴う他の苦痛
場と語り――元捕虜のオーラルヒストリーの方法
ビデオカメラを用いるオーラルヒストリーの特徴
聴き手のさまざまな工夫――加減する女性らしさ
語り手との距離・区切り
陰の支え

おわりに

Index of the book

Chapter I WHAT IS THE EX- POWS AND CIVILIAN INEREE ISSUE?
What are the problem of ex- Allied prisoners of war and civilian internees?
Burdock and tree roots：cultural gap?
Mental sequelae
British postwar ex- POW group
The Anti-Japanese Movement of Prisoners of War: A Trial against Japan
Ex-British civilian internees
British Anger at Japan -- The Misalignment of British and Japanese attitudes
"Cruel Japanese"
VJ Day festivities -- the roar of 1995
Ex-civilian internees in the ex- Dutch East Indies
EKNJ and JES -- a group of ex- Dutch civilian internees and ex- Prisoners of War

Emperor and Empress visit to the Netherlands and demonstrations in 2000

The gap in awareness between the Netherlands and Japan over offering flowers

A woman who broke down in tears at the demonstration

Another demonstration in Den Hague

American POW／Internee problem

Trial, apology and compensation from Japan

The overlap of the Holocaust and the Japanese mistreatment of prisoners of war

On the discourse that "the Atomic bomb saved prisoners and civilians"

"The Order to Annihilate" Prisoners of War

Ex- American civilian internees

Chapter II EXPERIENCE OF EX-PRISONERS

David Wilson held in a detention camp in Tokyo

Japanese men's "beating culture"?

Inconsistent Japanese?

POW Frank Bennett on the "Hell Ship" RISBON MARU

Pain that still lingers

Prisoners of the Kinkaseki camp

Jack Caplan, who burned the Japanese flag

Voices of ex- civilian internees

Dutch civilian internees -- 'The Pig Basket Incident'

Secondary trauma victims -- the Burma veterans who liberated the camp

Chapter III WOMEN'S TALES

Wives and widows' suffering

Sharing nightmares and frustrations

Divorce

A cycle of violence

Sex and male infertility／impotence

Nursing an illness

An un-shareable experience

Feelings on the husband's side

An effort to share the experience

Jack Caplan's wife Claudia speaks out
Scottish Widow
Iris Titherington, cheer leader with sky blue-coloured eyes
The way women talk
Hostility of wives
The myth of the Nation, the myth of the men／husbands

Chapter IV THE DADDY''S GIRLS' WAR
Daddy's Girls
Daughters making monuments
Daughters accompanying ex- POWs
Daughters internalizing father's trauma
Forgive but not forget
Daughters that vanish
Freudian interpretation of the example of Linda Lomax
Daughters who edit books／manuscripts
Sharing emotions and pain
Daughters who want to understand their father -- to bridge the distance
Daughters whose lives are absorbed in the care of the fathers
Daughters who continue to pass on dad's anger and questions
Conferences, exhibitions and biographies -- Daughters who inherit memories
The position of the son -- the contrast between the daughter and son of the POWs
"Missing Piece"

Chapter V ASPECTS OF TRAUMATIC MEMORY
What is traumatic memory?
Traumatic memories of the captives
The government order not to speak about the POW experience
Complex PTSD
About NICE: Why DSM is used to diagnose trauma of POWs
DSM-V and POW／Civilian Internee experience
A trauma triggered by an anniversary
Avoiding 'Japan' or anything 'Japanese'

Disgust of Japanese products; 'escape' from Japan

Trauma leading to self-denial

An outburst of anger

Misanthropy of a group of men confined to a small camp

Conviction and shame

DSM-V criteria, ICD- 11 and complex PTSD

Survivors' guilt and faith

Reexperiencing trauma -- nightmare recollections

Memories of "experiences" that are continually recalled by dreams

The experience of waking from a nightmare

Lawsuit against Japanese Government to deal with trauma

Nightmares at deathbed that bring back 'experiences' of POWs

Flashback and recall

Transfer of the ofject of hatred

Stress transferred to women and families

The relationship between Ex-Prisoners of War ／ Japan; its similarity of parent ／ child relationships in child abuse cases

Reconciliation and healing of Ex-Prisoners

PTSD and 'compensation neurosis': why Ex-Prisoners complain

Chapter VI THE CREDIBILITY OF THE STORIES ND MEMORIES OF EX- PRISONES

Accuracy of traumatic memory

Genuineness of traumatic memory -- about exaggeration and falsehood, in the case of Britain Prisoners and 'bullying'

The cultural sphere of 'confession' and the truthfulness of narrative and the importance of being a genuine narrator

Why do we talk about it after all those years? -- The credibility of the memories of elderly people who experienced war

A desire for intergenerational memory, penitence and regats:, a tendency to tell the truth in order to avoid doubt and misunderstanding

Memory selectivity and brain's recording area of suppressed memories

On wrong memory and their implications

Verification of memory with the possibility of 'wrong memory'

Nightmare memories — Murder of babies by the Japanese soldiers
Why hearsay memories spread
Tracing the 'wrong memory' and use it for fact-checking
Tamaki -- the camp guard who appears in the three testimonies
Age difference and perspective of narrators
combining memories

Chapter VII TALKING AND LISTENING TRAUMATIC MEMORIES
War and gender ethnicity: Rapport formation of narrator and listener
Relationship with Ex- Prisoners of War
Relationship with female civilian internees: gender and postcolonialism
Relationship with 'comfort woman'
Replacing positions: listening to traumatic memories in oral history
Characteristics of ex- captives' narratives
Regional differences -- temperament, constitution, cultural differences between the Allies,
Experiences of being colonised
Humur in storytelling
The meaning of talking about and tracing traumatic memories
Narrative and healing
Commonality with healing therapy
Therapeutic nemory change and war responsibility: The problem of therapeutic intervention
On the therapeutic significance of apologies and reparations: To heal distrust of Japan
Empathic fatigue and vicarious trauma in the oral history of war -- the trauma of the listener
Vicarious traumatization
Listener and stress: guilt and moral injury
Stress brought into the home
Other distress associated with oral history research
On the places where narrators speak
Characteristics of oral history using video cameras
Listeners' varying contrivances : the measured femininity of listener
Distance from the narrator
Supports behind the scene

Conclusion

4. 上野千鶴子の書評

「上野千鶴子が読む」（熊本日日新聞大型書評欄）2022年10月30日

痛い本である。著者の中尾知代さんが日本軍のイギリス人を中心とした連合軍捕虜について長く聴き取り調査をしていることは知っていた。それがどんなつらい苛酷な経験であるかも、想像がついた。取材を申しこんでも拒絶、憎悪、怒りを向けられ、相手の悲嘆や苦悩、混乱に立ち合う。

それに耐えて得られた800時間にわたるオーラル・ヒストリーのデータの背後には、責められ、試された末にようやくたどりついたラポール（信頼関係）に至るまでの気の遠くなる時間がある。

本書は2008年に刊行される予定だった。それが2022年まで14年も延びた理由には、ご本人の病気や家族の不幸などが重なった。1960年生まれの中尾さんは60歳を超した。もし本書が刊行されなかったとしたら、中尾さんの身体に蓄積した膨大な記憶は日の目を見ることがなかっただろう。本書にはそのすべてが書かれているわけではない。淡々と抑制された筆致の亀裂から、中尾さん自身の痛みが貌（かお）を出す。そしてその度に、読者にも痛みが奔（はし）る。

トラウマは伝染する。捕虜収容所における不条理な暴力や拷問、処罰、そして絶え間ない飢餓…それを経験した当事者の一次受傷、そしてそれにさらされた者の二次受傷、さらにそれを聴きとる者の三次受傷、それを読む読者の四次受傷、わけても日本人の読者であることのとくべつな受傷。なぜならその傷を与えたのは、ほかならぬ日本だからだ。

被害の記憶は語られるが、加害の記憶は語られない。「アンネの日記」に涙する日本人は、戦時下の捕虜収容所における日本兵や軍属の残虐性について無頓着か無知である。被害者が語るのは礼儀正しくふるまう「あの日本人がどうしてここまで残酷になれるのか？」という問いだ。

ヨーロッパ人のあいだでは「日本人は残酷な民族」で通っていると知って、ショックを受ける。そして日本のわたしたちは、捕虜を虐待した日本兵たち自身が、不条理な暴力にさらされていたことをよく知っている。そして残念なことに、それはいまでも日本人なら「あるある」として理解可能な、いじめや同調圧力の効果であることも。

本書は捕虜たち自身だけでなく、戦後復員した後の妻や子どもがさらされたトラウマや暴力についても論及する。もっとも苛烈な暴力は息子に向かい、息子は壊れるか離反する。妻や娘は生涯「家族という収容所に囚われ」てケアの役割を果たす。日本でも復員兵の家庭内暴力についてようやく関心が集まってきたところだ。1世紀近く経ってもトラウマは世代連鎖する。ウクライナとロシアでも、このトラウマはこの先1世紀以上続くだろうか。

本書はオーラルヒストリーの方法論についても精緻で周到な議論を展開する。証言の信憑性や語りの場や文脈による語りの変容、さらに聞き手の受傷にも目配りする。そこにジェンダー、人種、世代、年齢、社会的地位、体格の差すらが及ぼす影響についても繊細な配慮を忘れない。オーラル

ヒストリーは研究者をも安全圏には置かないのだ。

「慰安婦」問題やシベリア抑留者、満州引揚者、空襲被災者…などと同じく、この捕虜問題も終わっていない。日本は謝罪も補償もしていない。トラウマ被害者が謝罪と補償を求めるのは、傷を与えた外因である責任主体を確定し、トラウマから「自由になる」ためだという著者の洞察は深い。そして「名誉のために負債を払う」のは加害者の責任なのだ。

元捕虜のひと言を著者は引く。

「頼む、まず（日本が）謝ってくれたまえ、それから和解の話をしよう」

（『熊本日日』大型書評欄「上野千鶴子が読む」2022年10月30日付けから許可を得て転載）

BOOK REVIEW BY CHIZUKO UWNO

It is a painful book. I knew that the author, Tomoyo Nakao, had been doing long interviews and research on Allied prisoners, mainly British, held by the Japanese army. I could imagine what a painful and harsh experience it would be. Even if you offer to interview someone, while itself an act of respect to their voice and experience, you should expect that they will reject, hate, and anger you, and you will confront the other person's grief, anguish, and confusion.

Behind the 800 hours of oral history data that Tomoyo Nakao endured to collect, there's a mind-boggling time leading up to the rapport that she finally reached among the ex-POWs and their families, after being blamed and tried.

The book was scheduled for publication in 2008. The reason it was extended by 14 years to 2022 was due to her illness and the misfortunes of her family. Born in 1960, Nakao is over 60 now. Had this book not been published, Nakao's vast amount of memories accumulated on her body would never have seen the light of day. Not all of it is in this book. Through the cracks in the matter-of-factly restrained brushwork, Nakao's own pain emerges. And each time, the reader also suffers.

Trauma is contagious. The absurd violence, torture, punishment, and constant starvation in the prison camps ; the primary traumatic stress/injuries of the parties who experienced it, and the secondary traumatic stress/injuries of those exposed to it, and the tertiary traumatic stress/injuries of those who listen to it, and the quaternary traumatic stress/injuries of readers who read it, especially acute for Japanese readers. Because it is none other than Japan has inflicted those injurious wounds.

Memories of the traumatized and victimized are told in Japan, but memories of perpetrator and victimizers are not. The Japanese who weep over "Anne's Diary" (Anne is the victim of Holocaust) are either oblivious or ignorant of the brutality of Japanese soldiers／military auxiliaries in wartime POW camps. Victims talk about "How can those polite Japanese be so cruel?"

It is shocking to learn that among Europeans, the Japanese are regarded as a "cruel race ". And we in Japan are well aware that the Japanese soldiers who maltreated their captives were themselves subjected to absurd military violence. And, unfortunately, it's also a result of 'bullying' and 'pressure to conform' that Japanese people are still familiar with in the 21st century.

The book discusses the trauma and violence to which the prisoners, as well as their wives and children, were exposed after they were demobilized after the war. The most severe violence is directed at the sons, who break or secede. Wives and daughters play the role of caretakers for the rest of their lives "incarcerated in the camps called 'family'." In Japan, domestic violence among veterans is just beginning to attract attention. Nearly a century later, trauma continues to cascade through generations. Will the trauma continue in Ukraine and Russia for more than a century?

This book also presents a detailed and thorough discussion of oral history methodology. Nakao pays attention to the authenticity of the testimony, the transformation of the narrative according to the place and context, and without judgement, the injury of the listener. She is also sensitive to the impact upon the narrative of; gender, race, generation, age, social status, and even the physical size of the narrator and interviewer. Oral history allows researchers no safe zone of remote observation.

Like the "comfort women" issue, the Siberian detainees, the repatriates from Manchuria, and the air raid victims, this POW issue is far from being over. Japan has neither apologized nor compensated. The author's profound insight is that trauma victims seek apologies and compensation in order to establish the extrinsic culprits that caused their wounds and to "free" them from trauma. And it is the perpetrator's responsibility to "pay the debt of the honor."

The author quotes a phrase from an ex-POW:

"Please, apologize — then we can talk about reconciliation."

(Cited with permission from "Kumamoto Nichi-nichi Shinbun (The Kumamoto Daily News),"

large book review column, "Chizuko Ueno's Review" dated October 30, 2022.）
Chizuko Ueno: Chief director, Certified NPO Women's Action Network（WAN）
Professor Emeritus of the University of Tokyo, most well-known feminist in Japan.
Reprinted with the permission of The Kumamoto Daily News and Chizuko Ueno, WAN

斉藤環の書評（抜粋）
…連合軍捕虜のトラウマに関する調査じたいが稀少ではあるが、戦争トラウマという分野全体からみても、本書の記述の厚み、公平さ、志の高さを越えられる類書はそうあるまい。日本人であるゆえに、時に罵倒され調査を拒否される一方で、長時間の聴取による三次受傷、四次受傷のリスクをおかしながら、満身創痍で書き上げられた記念碑的労作である
斎藤環　筑波大学教授（精神病理学）
「みすず」no.722 1.2 月号 みすず書房 2023年 p.90 許可を得て抜粋。

REVIEW BY TAMAKI SAITO
…Investigations into the trauma of Allied prisoners are rare. Moreover, in the whole field of the study of war trauma, it is hard to find a similar book that exceeds the depth, fairness, and the virtuous ambition of this book.
Being a Japanese herself, the author has sometimes been reviled and refused to do the oral history during its undertaking, Nevertheless, risking the third and even fourth traumatic stress/injuries over a long period of research, she brought us this book. It is a monumental work of toil and author's sacrifice, shaped into hope.

Tamaki, Saito, Professor in psychopathology at the University of Tsukuba,
Excerpt from *MISUZU*, no.722 January-February 2023. Special Issue of the Intellectuals' Choice

５．正誤表

▼p15の5～6行目「捕虜になったオランダ人やオーストラリア人捕虜」→「捕虜になった連合軍兵士」

▼p15の最後から2行目「日本軍と国鉄職員の軍属」→「元国鉄職員を含む日本軍兵士」

▼p16の５行目「バターン戦など」→「バターン戦や」
　p16の６行目「バターンでは、コレヒドールの籠城戦で」→「バターンでは籠城戦で」

▼p29の11行目「戦陣訓練」→「戦陣訓」

▼p38の18行目「当時は万斉」→トル

▼p59最後の行「2014年」→「2015年」
　p60　１行目「門司港」→「長崎郊外の福岡第二分所跡地」「元捕虜→捕虜」
　2行目「オランダの元民間人抑留者はアメリカ人元捕虜に」→「オランダ人元捕虜の息子はアメリカ人領事に」

▼p72の13行目「連行され、日本の品川収容所」
　→「連行され、本人によると、日本の品川収容所」

▼p190の８行目「ジョーカー」
　→「チョーカー」

▼p215の11行目「旭日双章」→「旭日双光章」

▼p320の最後から6行目「B29のパイロット」
　パイロット→搭乗員

▼p321の8行目「広島の収容所にいたために→神戸の現長田区の俘虜病院にいたために」